



この本を手にとってくださり、誠にありがとうございます。皆さまは、どんなことを期待されて、この本を手にとってくださったのでしょうか。「解決志向」というキーワードに興味をもってくださった方、個別面接やケース会議に解決志向を活かそうと考えていらっしゃる方、学校現場でさまざまな課題を抱えて対応に苦慮されている方……。興味関心はさまざまかと思います。

筆者は、文部科学省の「海外先進教育研究支援プログラム」による在外研究において、解決志向アプローチの本家本元と言えるインスー・キム・バーグとスティーブ・ディ・シェイザーから大きな学びを得ました。本書は、その学びと、帰国後の学校現場への解決志向アプローチの応用の実践に基づいてまとめたものです。教職員やスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーの方々、また教育行政に携わっていらっしゃる方々にはもちろん、学校以外のさまざまな場における人間関係づくり、組織づくりに関心がおありの方々にも役立つものと考えています。

本書では、模擬事例をもとに対話の様子を逐語録形式で記述することで、解決志向についてわかりやすく伝え、深く理解していただけるよう工夫しました。模擬事例では、児童生徒、保護者、学校教職員をクライアントとし、相談内容は自傷行為、不登校、荒れる児童生徒、学級崩壊、難しい保護者、教職員の協働、いじめ対応など、現在の学校現場での多くの課題を含んでいます。

Part 1 では、解決志向の本質を深く理解するための勘所と、解決志向を学校で活かすためのポイントを解説しています。

Part 2 では、解決志向を用いての面接を実際に行う際のガイドとなるよう、個別面接の模擬事例を逐語録形式でまとめています。

Part 3 では、ケース会議を扱いました。ここでも模擬事例にもとづいて具体的なやり取りを逐語録形式にしています。ケース会議のような場面で解決志向を活かすことができると、解決志向が“学校の文化”として定着していくと考えています。

どのPartから読み始めるかは、皆さまの興味関心と直感で決めていただくのがいちばんかと思います。どのPartも繰り返しお読みいただけると、理解が深まるとともに身体化されて、実践場面で自然と活かすことができると確信しています。

皆さまが本書を読み終えられたとき、解決志向が便利なツールであると実感されるだけでなく、「解決志向は、まさに人間観・教育観・人生哲学である」と気づかれることを願っています。